1970.6.18 明治大学新聞

ロック・アウト・るぽ

和泉校

登校してきた学生は、ロックアウトの告示板にもかかわらず、帰ろうともせず正門前にたむろしている。アチコチにできたグループでは「キタネェナ」とうよりいっている。やっと九時三〇分頃になると、教人のM-Lの部隊が現われ、ベ平連が放あげし、反帝学評の学生が正門前に結集し抗議集会が開かれた。正門前と京王線明大前駅を往復するデモ隊は、往復するにつれてその数は次第に増していった。

正門前では座わり込む者、クラスごとに結集し、抗議文を書き、重く閉められた鉄扉に、告示板にそれを貼る者、アジル者。みな、不意打ちのロックアウトにとまどいと怒りの顔。一〇〇〇人近くになるくれあがった十一時三〇頃、教人によって固く閉ざされた鉄扉は開け放たれた。見守っ[illegible]た学生は「ワァー」という歓声とともに構内にナダレこんだ。中庭をジグザグデモを行なう学生を、教職員はただ遠くから眺める。スピーカーのみがヒステリックに叫ぶ。間もなく待機していたのか二〇名程の警官隊が大楯を持ってかけつけた。だが取り囲む学生の圧倒的多数になすすべもなく引きあげた。

だが、彼らの「見事な連携は機動隊の出動時にみられた。門前にいた学生はその場に二方に座わり込んだ。それを指揮していた二人が捕まった。なんの罪だ」と声が上った。後の大学当局の発表をみると逮捕者は「公務執行妨害」。無抵抗に座わりこんだままの学生に、機動隊が排除にかかった。ゴボウ抜きするかと思えば、何を血迷ったか、タテを振りあげ、足を蹴りあげシタイ放題の暴行、さっきまでヒステリックに叫んでいたスピーカーは、学生が目の前で無法な暴行を受けていることには沈黙。さんざんに蹴散らされたあとの正門前には、気を失なった二人の学生が横たわっていた。だが、教職員は忠実に門を閉めるだけ。これが彼らの語る「大学の自治」「信頼」なのだ。

それにしても、機動隊の出動のなんと早いことか……。

(Y)

本校

不意打ちのロックアウト――本校地区では、さすがに警戒体制の乱れは見せなかった。

七号館前から大学院横には、登校してきた学生約一〇〇人余りが集がっていた。全共闘系学生は姿を見せず、ほとんど一般学生。教職員との衝突、混乱もなかった。

七号館の鉄サクをはさんで、職員と学生が話していた。昨日五号館の自習室に忘れ物をしたらしい。

「僕を中に入れて下さい。手間はとらせません」

「いや、絶対に誰も入れません。場所と忘れ物を言って下さい。わたしがとってきてあげます」

「近くには、学生たちは近くの喫茶店へ吸い込まれていった。

夕刻には、二文闘、六闘委（六月闘争委員会）ら約五〇人が七号館から正門までデモを行なったが、機動隊があっという間にかけつけたのには、デモ隊も周囲の学生も苦笑を禁じ得なかった。

(S)

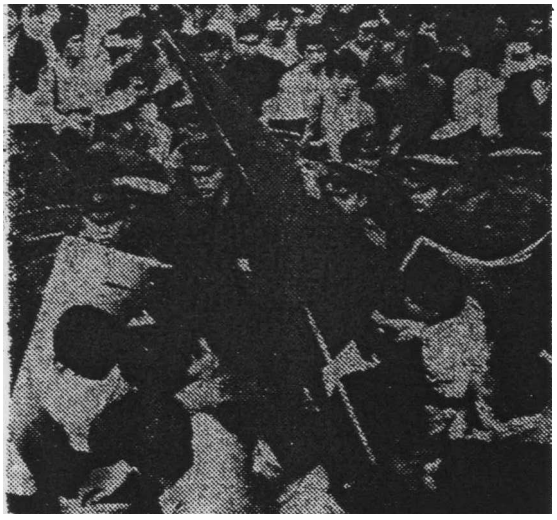
生田

生田地区のロック・アウトは「決定が十七日夜半であったために連絡がうまくとれず」（生田学生課）初日の十八日には、正門のみが閉鎖されるという変則的な措置がとられた。

このため、学生は生田駅側の入口から続々と入構。一見普段と何ら変わらないキャンパス風景だった。

一方、ロック・アウト措置を知った全共闘系学生は十前九時頃、高木工学部長を二号館前に連れ出し、「追及集会」を開催した。これには一般学生も多数つめかけ、一時は二号館前は約二〇〇名の学生で埋まった。

集会後、全共闘系学生の一部は工学部第一会議室で討論を展開。今後の方針などを検討した。また教闘委の約十名は団交を要求して、福田副学生部長の研究室を占拠し、気勢を上げた。

ロック・アウト初日の生田地区は他地区のように機動隊の姿も見えなかった。

(K)